

哀歌—das Klaglied

味伊捨庵空

大道廃れて仁義あて、
仁義廃れて礼楽あり。

礼楽廃れた現代には、
一体何があるのだろうか。

老聃は柔弱を尊び、

莊周は胡蝶の夢に逍遙し、

仲尼は世の風紀を糾さんとし、

伯夷は清廉を窮めて死す。

私、私は一体何をしよう。

人為の禍は極まって、

濁流は私をも飲み込もうとする。

この濁流に抗わんとして、

身を滅ぼした人の多きことよ。

煩わしい轟音と共に突き進む、

乗客の少ない電車で揺られながら、

疲れと Ennui に襲われて、

うとうととしている私の中で、

Rousseau の *Retour à la nature* という句が、

廢墟を吹く冷たい風のように、

淋しく、弱々しく響く。

人気がない山奥で、

小さな川がせせらぐ。

さらさらと冷涼な音をたてながら、

私の総てをつつみこむ。

その優しい川の底で、

泥に塗れた駄菓子^{ダ菓子}の包装が、

気味の悪いほどぎらぎらしながら、

黒い表情を私に見せる。

あなあはれ、無力なるかな、聖人の言。

まして私ごときに何ができようか。

ただ消え行く美を感傷するだけの私を、

偉大なる自然よ、赦し給へ。

一体現代に生きる人は、

国や文化や人種の違いを超えて、

皆文明の進歩に躍起になっているけども、

「進歩」とは全体何だろう。

使えそうな木はとにかく伐採したり、

砂漠をこれでもかというほど広げたり、

湖をからからに干上げたり、

川を異臭の漂うゴミ捨て場にしたり、

B u i l d i n g s

冷厳な建物で地面を埋め尽くしたり、

鉄のかたまりをあちこち走らせたり、

「役に立たない」ものはどんどん捨てたり、

どうしようもないゴミの処理に困ったり。

それが畢竟「進歩」なんだろうか。

地球から森が消えていく。

虫も魚も消えていく。

動物たちも消えていく。

そして善人も消えていく。

いくら死にたくないといっても、

いつかは悪人も死んでいく。

釈尊は諸行無常を説き、
莊周は万物斉同を説き、
コヘレトは一切は無意味と説き、
ヘラクレイトスは「パンタ・レイ」と説く。
それでも今なお人間は、
人為の魔力を信仰する。

ああ、毎日水道から水を飲んで、
洗濯機で洗われたポリエステルを着て、
誰がつくったのかわからない野菜や、
米やら肉やらお菓子を食べて、
ipod で音楽を聞きながら、
暖かい布団の中で、
木製のベッドの上に眠っていながら、
自然美の消えゆく悲しみを、
仄かに感じてしまうもどかしさ！

私はちゃんと知っている。
偽善と欺瞞にあふれた人世を厭う、
私自身の心に沈む、
海底の沈没船の錨のような、
重苦しいかたまりが、
とても見るに耐えないことは。
ただ、それよりも醜いものが、
いくら何でも多すぎるんじゃないかと、
思うことが時々あるだけ。
そんな私を慰めるのは、
太古の聖人の残り粕だけ。

こんな陰鬱な考えに浸りながら、
洋風の部屋に独り椅子に座って、
窓の外で暴れている、
豪雨と風と雷の、

神々しさに包まれつつ、

眠れぬ夜を過ごす私は、

一体いつまで生きるのだろうか。

Chatterton は十七才で死んだというのに。

Oh lass mich zuletzt 'Amen' schreiben,
denn ich weder Jude noch Christenmensch,
sondern nur ein armer Jüngling bin,
der weiß gar nichts, gewiß bloß nichts!